殺生石

楠山正雄

青空文庫

一

むかし後深草天皇の御代に、玄翁和尚という徳の高い坊さんがありました。日本の国中方々めぐり歩いて、ある時奥州から都へ帰ろうとする途中、白河の関を越えて、下野の那須野の原にかかりました。

那須野の原というのは十里四方もある広い広い原で、むかしはその間に一軒の家も無く、遠くの方に山がうっすり見えるばかりで、見渡す限り草がぼうぼうと生い茂って、きつねやしかがその中で寂しく鳴いているだけでした。玄翁はこの原を通りかかると、折ふし秋の末のことで、もう枯れかけたすすき尾花が白い綿をちらしたように一面にのびて、その間に咲き残った野菊やおみなえしが寂しそうにのぞいていました。

玄翁和尚は一日野原を歩きどおしに歩いてまだ半分も行かないうちに、短い秋の日はもう暮れかけて、見る見るそこらが暗くなってきました。この先いくら行っても泊る家を見つけるあてはないのですから、今夜は野宿をするかくごをきめて、それにしても、せめて腰をかけて休めるだけの木の陰でもないかと思って、夕やみの中でしきりに見ましたが、一本のひょろひょろ松さえ立ってはいませんでした。それでもと思ってまた少し行ってみると、草原の真ん中に、大きな石の立っているのが白く見えました。

「やれやれ、これで露をしのぐだけの屋根が出来た。」

と玄翁はつぶやきながら石のそばに寄ってみますと、ちょうど人間の背の高さぐらいのすべすべしたきれいな石でした。玄翁は石の頭に笠をかぶせ、草を結んでまくらにして、つえをわきに引き寄せたまま、ころりと横になりますと、何しろくたびれきっているものですから、間もなくとろとろと眠りかけました。

するとしばらくして、眠っているまくら元で、

「和尚さま、和尚さま。」

とかすかに呼ぶ声がしました。初めは夢うつつでその声を聞いていましたが、ふと気がついて目をあけますと、もう一面の真っ暗やみで、はるかな空の上で、かすかに星が二つ三つ光っているだけでした。

「すると今しがただれか呼んだと思ったのは、気の迷いであったか。」と玄翁は思って、起き上がりもしずに、そのまま目をつぶって寝ようとしました。するとまたうしろの方で、こんどは前よりもはっきり、

「和尚さま、和尚さま。」

と呼ぶ声がしました。

こんどこそ間違いはないと玄翁が思って、ひょいと起き上がりますと、どうでしょう、さっきの石のあった所がほんのり明るくなって、そのかすかな光の中に若い女のような姿がぼんやり見えていました。

玄翁もさすがにびっくりして、その女に向かって、

「呼んだのはあなたですか。あなたはどなたです。」

とたずねました。

すると女はかすかに笑ったようでしたが、やがて、

「びっくりなさるのはむりはありません。わたしはこの石の精です。」

といいました。

「その石の精がどうして迷って出て来たのです。何かわたしに御用があるのでしょうか。偶然ながら、こうして一晩のお宿を願ったお礼に、何かして上げることがあれば何でもしましょう。」

と玄翁はいいました。

すると女は涙をはらはらとこぼして、

「あなたは有り難いお坊様のようですから、くわしくわたしの話を聞いて頂いて、その上にお願いがあるのでございます。お聞きになったこともあるでしょうが、じつはわたしは、むかしなにがしの院さまの御所に召し使われた玉藻前という者でございます。もとをいいますと天竺の野に住んだ九尾のきつねでした。きつねは千年たつと美しい人間の女に化けるものです。わたしも千年の功を積むと、きれいな娘の姿になりました。するとある日天羅国の班足王という王さまが狩りの帰りにわたしを見つけて、御殿に連れ帰ってお后になさいました。わたしは長い間きつねでいた時分人間にいじめられとおしてきたことを思い出して、ふと悪い心がおこりました。そこである時天羅国にいろいろと天災がおこって人民が困っていると、わたしは班足王にすすめて、これはお墓の神のたたりですから、これから毎日十人ずつ人の首を切って、百日の間に千人の首をお墓に供えてよくおまつりなさい。きっと災いをのがれることができますといいました。じつは天災というのもわたしが術をつかってさせたのですが、王はこれを知らないものですから、わたしのいうとおりに、毎日罪のない人民を十人ずつ殺して、千人の首をまつりました。すると人民が王をうらんで、ある時一揆を起こして王を攻め殺しました。そしてわたしを見つけて、生け捕りにしようとさわぎました。わたしはとうに逃げ出して、山の中にかくれました。そうして何百年かたちました。

二

そのうちわたしはまたシナの国に渡って、殷の紂王というものお妃になりました。あの紂王にすすめて、百姓から重いみつぎものを取り立てさせ、非道の奢りにふけったり、罪もない民をつかまえて、むごたらしいしおきを行ったりした妲妃というのは、わたしのことでした。紂王がほろぼされると、わたしはまた山の中にかくれて、何百年か暮らしました。

おしまいに日本の国に来て、院さまのお召し使いの女になって、玉藻前と名のりました。わたしをおそばへお近づけになってから、院さまは始終重いお病におなやみになるようになりました。院さまのお命をとって、日本の国をほろぼそうとしたわたしのたくらみは、だんだん成就しかけました。それを見破ったのは陰陽師の安倍の泰成でした。わたしはとうとう泰成のために祈り伏せられて、正体を現してしまいました。そしてこの那須野の原に逃げ込んだのです。けれども日本は弓矢の国でした。天竺でも、シナでも、一度山か野にかくれればもうだれも追いかけて来る者はなかったのですが、こんどはそういきませんでした。間もなく院さまは三浦の介と千葉の介と二人の武士においいつけになって、何百騎の侍で那須野の原を狩り立ててわたしを射させました。わたしはもう逃げ道がなくなって、とうとう二人の武士の矢先にかかって倒れました。けれども体だけはほろびても、魂はほろびずに、この石になって残りま

した。わたしの根ぶかい悪念は石になってもほろびません。石のそばに寄るものは、人でも獣でも毒にあたって倒れました。みんなは殺生石といって、おそれてそばへ寄るものはありませんでした。それが今夜あなたに限って、殺生石のそばに夜を明かしながら、何にも災いのかからないのはふしぎです。これはきっと仏さまの道を深く信じていらっしゃる功徳に違いありません。あなたのような尊いお上人さまにお目にかかったのは、わたしのしあわせでした。どうかあなたのあらたかな法力で、わたしをお救いなすって下さいませんか。わたしはもう自分ながら自分の深い罪と迷いのために、このとおり石になってもなお苦しんでいるのでございます。」

こういって、女はほっとため息をつきました。

玄翁はだまって、じっと目をつぶったまま、女の話を聴いていました。やがて女の長い話がおしまいになりますと、静かに目をあいて、やさしく女の姿を見ながら、

「うん、うん、分かった。わたしの力の及ぶだけはやってみよう。安心して帰るがいい。」

といいました。

女はにっこり笑って、すっとかき消すように見えなくなりました。

そうこうするうちに、いつか夜がしらしら明けはなれてきました。玄翁ははじめてそこらを見回しますと、石はゆうべのままに白く立っていました。見ると石のまわりには、二三町の間ろくろく草も生えてはいませんでした。そして小鳥や虫が何千となく重なり合って死んでいました。

玄翁は今更殺生石におそろしい毒のあることを知って、ぞっとしました。

もうすっかり明るくなって、日が昇りかけました。草の上の露がきらきら輝き出しました。

玄翁は殺生石の前に座って、熱心にお経を読みました。そして殺生石の霊をまつってやりました。殺生石がかすかに動いたようでした。

やがてお経がすむと、玄翁は立ち上がって、呪文を唱えながら、持っていたつえで三度石をうちました。すると静かに石は真ん中から二つにわれて、やがて霜柱がくずれるように、ぐさぐさといくつかに小さくわれていきました。

その後旅の人が殺生石のそばを通っても、もう災いはおこらなかったそうです。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
　　1983（昭和58）年4月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年8月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

殺生石

楠山正雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/